
死人チャット

愛華龍蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死人チャット

【Nコード】

N2848N

【作者名】

愛華龍蓮

【あらすじ】

俺はある日死人チャットというサイトを見つけた…

見つけなければ良かったのに…

夢

ここは…どこだ…？

真っ暗だ…

何も聞こえない。

何も感じない。

手を伸ばしても、
何にも触れられない。

「ああ…」

小さな光が見えた…

光に群がる

汚らしい蛾のように
俺はその光の呪縛にかかる。

「ひ……かり……」

でも……光の向こうにあった景色は……

「う……うわぁー！」

自分の眼光が開くのが分かる。

眼球が飛び出そうだ。

そこで俺が目にした物。
それは…

血まみれになっている
自分の姿。
俺のことをじっと見つめて…狂気の瞳…

身体がまた闇へと沈んでゆく

静かに俺は現実の世界へと引き戻される。

「はあ…はあ…はあ…」

頭が痛い。

「何か…夢を見ていた気がしたんだが…？」

平和な日々なんて…
暇過ぎる。

夢の方がよっぽど…

そんなことを思いながら俺はパソコンをつける。

「……………」

カチ…カチ…カチ…。

「ふ…なんだこれ」

死人チャット。

なんとも怪しいチャットだ…

「まあ…暇つぶしだし…いいか…」

切れないチャット

死人チャットでは話したいことをなんでも話せた

学校での不満。

家族の不満。

時には誰かを殺してやりたいなどと書き込んだ時もあった。

ただ…今日は少し違った

「最近これも飽きてきたな…」

不満もさすがに書き込み続けてきたら無くなることはないが飽きてきた。

「…?…新しい書き込み」

今頃思ったが今書き込んだきた首斬りという人物は相当の暇人なんだな…

何時に來ても絶対にいる

「…なあお前ら…この死人チャットに生きてる人間が居るって言うたら驚くか?」

何を書いてるんだこいつは…
確かにこのチャットでは全員が死んでいる設定で話してるケド…

「居る…わけないだろ…」

新しい書き込みにはこう書かれていた。
毒殺という人物が書き込んだらしい。

「居るんだよ。」

「じゃあ…俺達を裏切ったんだから…」

「そうさ…だから…裁きをくださなきゃ」

「血の契約を…破るなんてな…」

「しかもそいつ…」

「そいつ？」

「今このチャット見てんだよ」

「……裏切り者が……？」

なんか……こいつら頭おかしい……
今見てる生きてる人間って……

パソコンを……パソコンを切ろう……

「うつ！嘘だろ！」

強制終了を押しているのに……

「きつ！切れるよ！切れる！早く！」

何度押してもパソコンは切れない。

血の裁き

消えない…

消えない…

消えない…

どうしてもパソコンの電源が落ちてくれない。

「あ…ああ…」

ふとパソコンの画面を見ると…

「裏切り者」

「裏切り者」

「裁きをくださなきゃ」

「契約だものね」

「あははははは」

「なに？裏切り者？」

「ええ……」

「じゃあ……皆で裏切り者に会いに行こうか……」

会いに……？

こいつらが……

「裏切り者って！」

「裁きを」

「裁きつて！いったいなんのことだよっ！」

「早く……」

「裏切り者……」

「よく今まで生きてたね」

「……早く私達と同じに……」

「そっだよ」

「おっ！同じに……て……」

「早く…同じ裁きを…」

「同じ裁き…!？」

「同じに…早く」

「くくく…あはははははは」

どこかという表現ができないほど周りから声が聞こえる…

俺は今…

誰と話しているんだ…

何に脅えているんだ。

「もう…やめろーっ!」

そして…俺の意識は
パソコンの電源が落ちたように…
パチンッと切れた。

平凡な日々と赤い絵の具

目が覚めると辺りには
いつも嫌っていた平和な光景が広がっていた。

でも…少し違っていた。

辺りには赤い絵の具みたいなものが

床にも

壁にも

ドアにも

そして…

俺の手にもベツタリと付いていた。

いや…

俺に関しては手だけじゃなく身体中に付着していた。

「風呂…入らなきゃ…」

一階へと続く階段にも
ベツタリと絵の具が塗られている。

「母さん…新しいふ…く」

階段の下で母さんが倒れている。

母さんも絵の具だらけだ

「母さん起きろよ。」

しかし…

母さんから返事が返ってくることはなかった。

「かあ…さん？」

母さんに触れると。
ヒンヤリと冷たかった。

母さんの顔は何か恐ろしい物を見てそのまま顔が固まってしまっているようだった。

母さんが死んだ。

「…まず風呂に入ろう。」

俺は驚くほど冷静だった

そのまま風呂場に向かう廊下で父さんと妹が寝ていたが放っておいた。

まるでもう死んでいることを知っていたみたいに

「ガス付け忘れた…」

まあいい。

ガスを付けに行くのも
面倒だ。

ガチャッン!!

俺のズボンのポケットから大きめの包丁が落ちた

その包丁にも絵の具が付いていた。

いや…絵の具じゃない。

これは…血だ。

人間の。

誰の血…？

そんなこと知っている…

母さん達の血だ…

だって僕が母さん達を…

きっと俺は国から裁きを受けるだろう。

どんな裁きかな…

毒ガスで毒殺か…

首をナイフで…首斬りか

俺…死人チャットでなんて名前で入ってたっけ…？

ああ…思いだした。

首吊りだ…

もうすぐ…
皆の仲間になれるよ。

遠くからかすかにサイレンの音が聞こえた。

平凡な日々と赤い絵の具（後書き）

はい…

くそ作品ですいません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2848n/>

死人チャット

2011年10月7日19時32分発行